靖国問題の迷路

「心の自由」ですむのなら

政態◆拝・見

根本 清樹（編集委員）

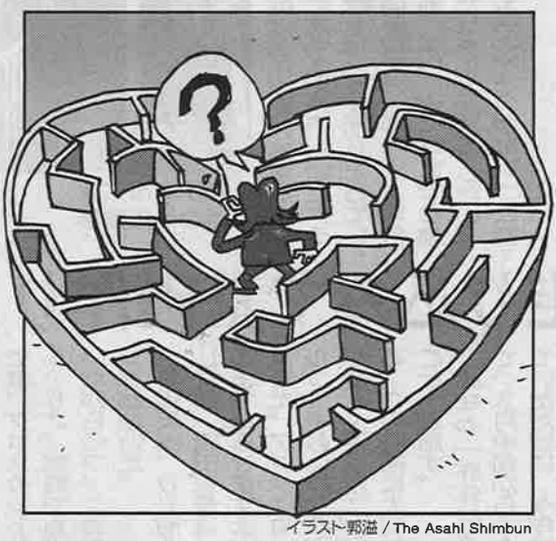
自伝的な小説『東京タワー』で大ブレークしたリリー・フランキーさん。その旧作『増量・誰も知らない名言集』に、印象的なエピソードがある。

小学校5年のリリー少年は、隣の席の女子とぎくしゃくしていた。少年にとっての彼女は、「第三希望」の隣人にすぎず、優しくできない。ところが、彼女にとっての少年は、第三希望どころか「ドラフト外」だった。真実を知り、へこむ少年。そんなある日、彼女は言った。

「消しゴムちょーだい!!」。彼女は少年のゴムを取り上げ、半分に切った……。

リリーさんは述懐する。あれは、「そんな間柄でもどうにかやっていかなければいけないのよ、というオトナの優しさと愛情の漂う言葉だった」。

険悪な関係を続けるよりは、心のわだかまりをひとまず棚上げし、たとえ表向きだけでも友好的に振る舞う方が双方の利益である、という現実的な判断。そのための具体的な言葉と行動。リリーさんの言う「オトナの優しさ」とは、ほとんど政治的な知恵のことだ。



イラスト・野溢 / The Asahi Shimbun

などということを考えながら、先週の衆院予算委員会の基本的質疑を傍聴していた。

ここでの「どうにかやっていかなければいけない」関係は、対中国、対韓国の外交である。

何人かがこの問題を取り上げたなかで、社民党の辻元清美氏の議論は一つの核心を突いた。

小泉首相は靖国参拝への批判を「心の問題」だと突っぱねてきた。辻元氏は切り込んだ。

「総理、ぜひ『心の問題』の迷路から抜けていただけないか」

第一。「心の自由」はみんなにあるが、それを行動や発言に移したときには責任が生じる。靖国参拝は首相個人の心の問題とは別次元の話になっている。

第二。民族対立、歴史的な恩讐（おんしゅう）といった国際紛争の原因は、要は心の問題、価値観の対立の問題だ。心と心のぶつかりあいにいかに折り合いをつけていくかが、「政治の役割」だ。

首相の答弁は相変わらずだった。「心の問題は大事じゃないですか。心は自由です」

日中、日韓の友好関係が双方の利益であるという認識では、ふたりは一致している。

しかし、その利益の実現のために「心のぶつかりあい」をどう解きほぐしていくのかという点に、首相の関心は向かない。

ムハンマドに帰依する人と、キリストに帰依する人の心に、優劣をつけることはできない。宗教の尊厳も、表現の自由も、等しくかけがえがない。

信仰上の、思想上の真実をそれぞれが貫き通そうとすれば、争いはいつまでも終わらない。比べようのないものを比べようとする限り、人々は迷路の中をさまよい続けることになる。

心や価値の問題は棚上げし、比較可能な利益の次元に、対立を絞り込む。政治的な共存は、そういうやり方で、常に暫定的に実現されるほかない。

内面の問題に深入りしないという政治の作法は、「人類の多年にわたる努力の成果」（憲法97条）の一つだろう。日本の政治はなお、この流儀にうとい。憲法や教育基本法の改正論議で、国民の「心」の中に国家が踏み込もうという主張が根強いことも、それを示している。

03年の総選挙にあたり、当時の菅直人・民主党代表は、重要なメッセージを掲げていた。

病気や貧困といった不幸の原因は、政治の力で相当程度取り除くことができる。これに対し、幸福は精神的なものに支えられていることが多く、「権力が関与すべきでない」。

従って、政治の目標は「最小不幸社会」の実現にとどまるべきであり、心にかかわる「『価値』の実現」からは手をひく。

あまり注目されなかった菅氏の政治哲学は、いま、むしろその意義を増していると思う。

「小泉劇場」は、「心の問題の迷路」を舞台に残したまま幕を閉じるだろうからである。

column@asahi.com